

NO. 39
October '05

Newsletter

神戸女学院大学
女性学
インスティテュート

ナヌムの家のハルモニさんの証言を聞く会

高橋友子

現在の日本とアジアの関係にある対立の原因の一つに、日本における戦争経験の風化があります。そこで、戦後60年と北京世界女性会議10年の双方を記念して、日本軍「慰安婦」（日本軍性奴隷制度）問題を取りあげます。この問題は6月の連続セミナーでも取りあげましたが、今回は人権教育委員会との協賛で、太平洋戦争期に「慰安婦」として連行された経験をもつ韓国人女性（ハルモニさん）が暮らすナヌムの家から、ハルモニさんと日本人スタッフの各1名をお招きして証言をしていただき、現在なお未解決の問題である日本軍「慰安婦」の問題についての理解を、本学のひとりでも多くの学生さんと教職員の方々、そして学外からの参加者のあいだで深め、この問題についての意識を高めることに努めたいと思います。

この企画の発案は、中学・高等学校では受験などの制約のために日本の戦争体験が十分に学べていないので、この問題をぜひ全学的に取りあげ、より多くの学生に知ってもらいたいという総合文化学科石川康宏先生の4年生のゼミ生さんたちによって出されたものです。ゼミ生さんたちの要望に応えるためにも、ぜひ充実した内容にしたいです。

ハルモニさんの証言を聞く会の日時と会場、プログラムは以下のとおりです。多くの方のご参加を願っております。
(文学部助教授：西洋史)

日時：2005年12月20日(火) 午後2時より
会場：JD館会議室

～プログラムの内容～

挨拶と講演者の紹介

(司会：高橋友子女性学インスティテュート・ディレクター)

日本軍「慰安婦」問題について
(総合文化学科・上野輝将先生)

～休憩～

ハルモニさんの証言
質疑応答
閉会の辞

ミニ・シンポジウム報告

飯田祐子

2月22日、「良妻賢母を乗り越えて」と題して、講演・ミニシンポジウムが開催されました。講師としてお迎えしたのは、『良妻賢母という規範』（勁草書房、1991）などのご著書がある小山静子先生です。広く「女子教育を超えて」という演題で、お話をいただきました。後半は、原田園子学長と総合文化学科より私（飯田）が加わってのミニシンポジウムとなり、神戸女学院の特殊性に触れながら、良妻賢母主義や女子教育について、活発な議論がなされました。

小山先生のご講演は、「女子教育」は論じられても「男子教育」は論じられないという非対称性を浮き彫りにすることから始められました。明治にできた教育制度がもともと非常に偏っていたこと、戦後ようやく男女平等な教育制度がつくられたこと、しかしこの制度上の平等と現実とは異なり、女子にのみ女子としての特性を意識させる教育がなされてきたことが、さまざまなデータとともに具体的に示されました。既存の「女子教育」という括りは、この非対称性を顕著に表しています。それゆえ「超えて」ゆかねばならない。女子の能力をのばす教育として、どのような形が望ましいのか、この問いに答えるとき、ジェンダーの非対称性に自覚的でなければならぬと説かれて、お話を結ばれました。

神戸女学院での女子教育は、どうあるべきか。「女子」という枠組みを自明のものとして、問い直す力を持った学生を育てていくことが、その目的に、またより遠くへ学生を導く手段にもなるはずだと、あらためてジェンダー・スタディーズの必要性を感じます。女性学インスティテュートは、その教育の拠点として、今後いっそう重要な役割を果たし得ると思います。

(文学部助教授：日本文学)

連続セミナー「ジェンダーとセクシュアリティ」を担当して

【第1回：2005年6月10日】……………高橋友子

●「戦時下における兵士のセクシュアリティ管理」

今年度の女性学インスティテュートの連続セミナーのテーマは、「ジェンダーとセクシュアリティ」です。第1回目は、私が「戦時下における兵士のセクシュアリティ管理」と題して、日本軍「慰安婦」（性奴隷制

度)の問題を取りあげました。

まずはじめに、この問題が民族差別と女性差別をはらみ、戦後60年を経た現在もなお未解決のままであることを訴えました。次に、本学総合文化学科石川康宏先生の4年生ゼミの木下さんと堤さんが、昨年9月にナナムの家(「慰安婦」にされた被害者の方が生活されているソウル郊外の施設と記念館)の訪問と水曜集会への参加、そしてその前後の学習の過程を綴った『ハルモニからの宿題』(冬弓舎、2005年2月刊行)ができるまでのことを話してくれました。その後、私が軍「慰安婦」の問題化の過程を、証言をまとめたビデオを用いながら説明するとともに、韓国や中国との間でしばしば外交問題になっている歴史教科書の問題を取りあげ、日本が過去に犯した戦争の責任を反映させた歴史教育を、若い世代に行ない、正しい歴史認識を培ってもらうことがいかに重要であるかを訴えました。

当日の参加者は20余名で、昨年より少なかったですが、会場からの質問や意見も出され、盛況に講義を終えることができたのを、喜ばしく思います。木下さんと堤さん、ご協力ありがとうございました。

(文学部助教授：西洋史)

【第2回：2005年6月17日】……………米田眞澄
●「婚姻の自由の射程：同性婚をめぐる法的論点」

私が担当した講座では、「婚姻の自由の射程：同性婚をめぐる法的論点」と題してアメリカ合衆国での同性婚の是非をめぐる論争および訴訟を中心に取り上げた。

2004年2月にはカリフォルニア市長が同性カップルに結婚許可証を発行したことから、その発行停止を求める訴訟が出され、ついでカリフォルニア州法が同性婚を認めないのは平等原則を定めた州憲法に違反するとして、サンフランシスコ市が同州を相手に裁判を提起したりした。これはいわゆる1審では市側の主張を全面的に支持する判決が下された。

1審は、婚姻が異性間に限るとのカリフォルニアの伝統的な婚姻についての理解を具現化しているとの州の主張に対しては、1948年の異人種間の婚姻を禁止していた州法が州最高裁によって違憲判決が下されたことを引用し、誰と結婚するかを決める権利は基本的人権であり、伝統を理由に婚姻の自由を侵害する差別法を正当化することはできないと述べた。

カリフォルニア州では2000年に同性カップルに法律婚カップルと同様の権利を認めるドメスティック・パートナー制度を発足し、2005年1月から法律も施行されている。講座の参加者からは、公権力からの正式な「婚姻」としての認証がもたらす効果について興味深い議論が展開された。

日本では同性愛者グループによる公的施設(府中青年の家)の利用拒否をめぐる裁判例があり、利用拒否

の違法性が認められている。

(文学部助教授：法律学)

【第3回：2005年6月24日】……………石谷真一
●「深層心理学とセクシュアリティ」

今回、「深層心理学とセクシュアリティ」とのテーマで、主にフロイトの精神分析とユングの分析心理学の観点から見たセクシュアリティの理解について述べた。フロイトのセクシュアリティ理解の特徴は、それが男女の身体的違いに基づき、幼少期から発達的に形成されていくとの見方をとるところにある。そして幼少期のセクシュアリティ形成の歪みが後年成人に達して神経症発症の素地を作ると考える。こうした観点から男女のセクシュアリティの発達を見たとき、男性に比べ女性のセクシュアリティの形成は複雑で隘路に満ち、袋小路に迷いこみ発達は中途で終わりがちだとフロイトは考えていたことを紹介した。

一方ユングは心自体がもつ生成発展の過程に注目し、セクシュアリティを身体に基礎付けられたものとしてではなく、心の発展過程の、身体的あるいは対人関係的現われとして見ていることを述べた。心は典型的には、男性原理である思考機能と女性原理である感情・情緒機能とに分かれて発展するが、一般的には前者は男性で、後者は女性で優勢な意識の態度となると考える。両機能が統合されることが心の自己発展の目標であるが、それは男性と女性とが互いに惹きつけあい心理的に合一することを通じて、つまり対人的な次元で取り組まれる課題ともなる。セクシュアリティは、高い象徴性を孕んだ男女の合一へのモチベーションとして捉えなおされることを紹介した。

(人間科学部助教授：臨床心理学)

【第4回：2005年7月1日】……………横田恵子
●「知る、考える、そして動く！」

『今どき高校生たち』が描く性とコミュニケーション

日本では10代から20代の若い人たちに、HIV感染症が広がってきています。連続講座最終回は、このような社会情勢を受けての企画でした。

性に関する情報は、どうすれば効果的に若者に届くのでしょうか？若者と似ても似つかぬ立場の大人が一方的な語り口調で人ごとのように語る性や性感染症の話は、当の若者たちには届かない、と専門家は考えています。つまり「自分たちのことは自分たちが一番良く知っている」ということなのです。これは開発的アプローチとかピア・エデュケーションと呼ばれる手法です。

今回ご披露したのはこの考え方に基づいて作り上げられたプログラムでした。このグループの活動は、ク

〈P.4に続く〉

ある老婦人の肖像

孟 真理

私は中学高校時代を神戸女学院に似た雰囲気のミッションスクールで過ごしたのだが、映像作家をしている当時の友人が、90歳近いひとりの同窓生、夏子さんに焦点をあてて撮影した1本のドキュメンタリー作品を見る機会があった。

フィルムの前半では、夏子さんとクラスメートが、老朽化のため立て替えられる直前の校舎内を歩く。関東大震災後に再建されたこの校舎の献堂式の際に在籍していた彼女たちは、深いしわの刻まれた手でいとおむように、古びた設備や調度品に触れながら、女学校時代の思い出を少女のように目を輝かせて語る。

後半部では、東京郊外の瀟洒な邸宅で一人暮らす夏子さんの現在が映し出される。ピアノに向かい楽しげに讃美歌を弾きながら口ずさみ、年齢を感じさせないしっかりしたタッチでベートーヴェンのソナタを弾きこなし、あるいは丁寧に紅茶を淹れる彼女の端正な仕草は、一人暮らしの老婦人の日々の生活が、規律と充実感に満ちたものであることをうかがわせる。「学校時代への思いが強すぎると皆から言われるの」と、むしろ自信を込めて語る夏子さんは、「ルック・アップ」という70年前の恩師の言葉を今なお心にとめ、「ディグレードしたくない」と繰り返す。

女学校時代と現在の間に横たわる70年の歳月について詳しくは語られないが、その間、激動の昭和期を生きた彼女自身の人生も決して平坦でなかったことは想像に難くない。その人生を貫いて、若き日にうけた教育が今も彼女の中に息づいていることに、背筋を正される思いだった。

フィルムの終盤で詩編第23編「主は我が牧者なり、われ乏しきことあらじ…」の長い詩句を、英語でよどみなく暗唱する夏子さんの声を聴きながら、キリスト教精神にもとづく女子教育の理想が、素朴に生徒たちに浸透していった古き良き時代を思った。今、あふれかえる情報と選択肢の中をさまよう学生生徒たちには、そうした理想はかえってストレートには伝わりにくくなっているが、かたちを変えながらも受け渡されていくべき精神がしかと存在していることは、神戸女学院にもそのままあてはまるのだろうと思った。

(文学部教授：ドイツ文学)

「ジェンダー」をめぐる戦い

森 永康子

吉田秋生さんは、私の好きな漫画家の一人である。その作品の一つ『吉祥天女』に、こんなセリフがある。「本来“こうあるべきだ”と思い込んでいる相手から突然反撃されるとそんなに腹のたつもんかね」。自分を脅かす女性に打撃を与えようと画策する男性に対して、他の男性が放った言葉である。

性別を理由にした異なる取り扱い。わかりやすいのは、職場での昇進、給料、定年の違いだろう。昇進が遅い、給料が安い、定年が早い。その理由はただ一つ、「女性だから」。もちろん、職場だけではない。

「男女にはそれぞれふさわしい役割がある」。あなたがどんな人かを見ることなく、ただ性別だけで生き方が決められる。「ジェンダー」という言葉は、その問題をうまく説明してくれる。そして、性別によるこうしたゆがみを見直そうという「ジェンダー・フリー」。本学での女性学やジェンダー関連の授業は、「ジェンダー」や「ジェンダー・フリー」について考えるきっかけを提供している。

最近、その「ジェンダー・フリー」を押しとどめようとする動き「ジェンダー・フリー・バッシング」が活発になってきた。その様子を見聞きするにつけ、冒頭のセリフが私の頭の中に浮かぶ。「女とはこうあるべきだ」「女にこれができるわけがない」と思い込んでいた人たちが、その思い込みに反する出来事や事例にショックを受け、どうにかして今の自分の地位を守りたいと焦る気配がただよってくる。

今では当たり前の「参政権」。しかし、それさえも「女性も政治に参加したいんです!」「あ、そうですね!では、法律を変えましょう。明日から女性も投票できるし、立候補だって大丈夫ですよ。がんばってくださいね」とはいかなかった。20世紀は、女性にも人権があるのだということを社会が徐々に受け入れるようになってきた時代とも言える。それは、また既得権を守ろうとする人たちと権利を得ようとする人たちの「戦いの世紀」であったのかもしれない。

憲法の中に「家庭生活における両性の平等」(24条)がうたわれて60年。「ジェンダー」をめぐる戦いは今も続く。

(人間科学部教授：心理学)

イズやベープサート、寸劇などを通してわかりやすくエイズについての知識を伝え、性的な関係に入るときの自己決定の問題について呈示し、観客も巻き込んで対話をします。さらにそのメニューに「コンドーム装着実習」というパートを用意しています。コンドームをきちんと正確につけることは、HIVなどの性感染症を予防するためにとっても大切なことだからです。ですからこのパートでは、舞台上の「るるくめいと」たちだけではなく、聴衆も参加して、実際にコンドームを模型につけてみるという体験をします。…7月1日にあの場所に来てくださった皆様はどのようにお感じになったのでしょうか。是非、いろいろなお意見、ご感想をお聞かせ頂きたいと思っています。そして今後とも、若い人たちのエネルギーに期待を寄せつつ応援していただけますように。(文学部助教授：社会学)

2005年度前期活動報告

特別講演会

2005年6月3日(金)

「国境を越えた女たち

—オーストラリアの日本人戦争花嫁—

会場：神戸女学院講堂

講師：田村 恵子氏



田村恵子氏

(オーストラリア戦争記念館
日豪研究プロジェクト研究員
オーストラリア国立大学
客員研究員)

出席者：60名

連続セミナー「ジェンダーとセクシュアリティ」

会場：神戸女学院大学ジュリア・ダッドレー館104教室

〈第1回〉2005年6月10日(金)

「戦時下における兵士のセクシュアリティ管理」

講師：高橋友子氏

(神戸女学院大学文学部助教授：西洋史)

〈第2回〉2005年6月17日(金)

「婚姻の自由の射程：同性婚をめぐる法的論点」

講師：米田真澄氏

(神戸女学院大学文学部助教授：法学)

〈第3回〉2005年6月24日(金)

「深層心理学とセクシュアリティ」

講師：石谷真一氏

(神戸女学院大学人間科学部助教授：臨床心理学)

〈第4回〉2005年7月1日(金)

「知る、考える、そして動く!：『今どき高校生たち』が描く性とコミュニケーション」

講師：横田恵子氏

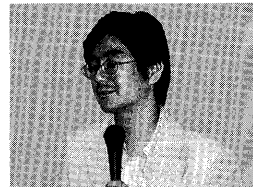
(神戸女学院大学文学部助教授：社会学)



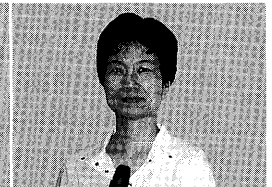
高橋友子氏



米田真澄氏



石谷真一氏



横田恵子氏

[受講者：24名

平均出席者：23名(当日参加者を含む)

修了証交付者：18名]

2005年度後期講演会のご案内

■学外講演会

会場：宝塚市立男女共同参画センター・エル(宝塚市)

※阪急・JR「宝塚」下車スグ、「ソリオ2」4F

〈第1回〉2005年10月12日(水) 10:00~11:30

「夫婦ゲンカの社会史

—琉球の慣習法と裁判をめぐる—」

講師：真栄平房昭氏

(神戸女学院大学文学部教授：日本史)

〈第2回〉2005年10月25日(火) 14:00~15:30

「カウンセリングと人間科学」

講師：池見 陽氏

(神戸女学院大学人間科学部教授：カウンセリング)

■ハルモニさんの講演会

2005年12月20日(火) 14:00~17:00

会場：神戸女学院大学JD館会議室

2005年度女性学インスティテュート編集委員

石川康宏、森永康子、難波江和英、清水忠重、高橋友子
(委員長)(ABC順) 編集事務：溝口芳子

編集・発行：神戸女学院大学女性学インスティテュート

〒662-8505 西宮市岡田山4-1 TEL/FAX:(0798)51-8545

E-mail:gender@mail.kobe-c.ac.jp

URL <http://www.kobe-c.ac.jp/gender/>